

3月23日（水）

（早川洋輔）

病院から出された処方せん薬の在庫が薬局にない事から、お客様を待たせる状態が続いている。

待ち時間を減らす、又薬局内の混乱を減らす為にも避難所にいる人の服薬内容の確認調査を行った。

大船渡市の避難所リアスホールには越前高田より避難した人も何人かいた。服薬内容を聞くと「喋った所で貰えないんでしょ」と言う方も。バングラデシュを思い出す光景だ。

だいたいの人はお薬手帳はない。ある方はそれを持参して大船渡病院をすでに受診している。

北小学校の避難所では巡回診療があり、必要最低限の薬はあるとのこと。中には市販の薬も見られた。

ある方は、薬は必要ないけどオムツが欲しいと言い、物資が行き届いてない状況も。

失禁したオムツをそのまま着用し乾かして使っている。食べる＝排泄なので食べない様にしている。

オムツ不足により体調管理、衛生管理が損なわれる状況だ。

薬やいろんな物資はある所にはあるが、あっても制限があり避難した方々は我慢の日々を送っていた。

日常で当たり前の事が当たり前ではない。

被害を受けてない人は当たり前にしていることを見つめ直し、有り難みを感じるべきだと思った。

（藤田雄太）

今日のコンディションは普段通りである。身体が軽い。

さて、昨日に引き続き大船渡にて行動、私は早川主任に同行、被災地の方々がどういった薬を飲んでいるのかを聞き取り、坂本先生へ報告するという任務にあたった。

聞き取りは避難所2カ所で行い、サンプルは2人合わせて十数件ほど集まった。  
この日は再び東和薬局に移動し、24日の活動の準備にはいるのであった。



(中嶋優太)

3月23日(水)

天気：晴れ

気温：5℃

体調：鼻炎強

薬剤師の質を維持するために。

患者数は落ち着いてきた。

病院でも他医療機関で受け入れられる患者は診察せず、今すぐに診察しなければならぬ患者だけを受けれる姿勢だ。

これもどうかと思ったが…

処方スタイルは未だ改善されず。

今日は昨日と違う薬局を視察。

手元に残っていたお薬手帳、薬剤情報提供用紙を持参で処方してもらう。  
患者さんからしてみれば

「いつもと同じ薬をもらえて一安心」

落ち着いてみると剤形、用法などの微妙な違いから、処方量が異なる処方など見逃せない違いまで。  
お薬手帳などのツールや、服薬指導の際に問題が浮かび上がってくる。

大半の服薬指導には

「いつもと同じ薬でしょ」

と一蹴される場合がほとんどだが、勇気を持って一步踏み込んでみると丁寧な問診、確認、指導が必要であることを実感する。

「この薬は1回に何錠飲んでいましたか？」

この質問から始まった。

もしかすると

「いつもと同じ薬です。」

で過ごせた状況かもしれない。

抗血液凝固剤の処方量。

今回はかかりつけの病院が震災にあい、大船渡地区の病院を受診した。

お薬手帳がなく、薬情持参で「同じ薬」を処方してもらったとのこと。

話を進めると、その薬情は診察当初のもので、5～6年前のものだという。

今回の処方「1錠」

前回まではしばらく「4錠」

診察を受けずに、薬情をそのまま転記した処方したという典型的な例だ。

処方量に疑問が残ることを説明し、たまたま近くの医院だったため、患者さんとともにDrに面会。

患者さんから聞いた情報をDrに報告。

処方の変更。

おせっかいかもしれない確認から生まれた処方変更。  
普段の状況であれば滅多にない症例かもしれない。

しかし、患者主体の情報にもと基づいた処方が続くうちは、このような症例は  
続々と出てくる可能性が高いと予想される。

このような状況だからこそ、  
システムが復旧していないから普段の業務が出来ないとか、  
忙しいから確認してられない  
などいっていたら、医薬分業の意味も無くなるばかりか、医療の質、安全その  
ものの確保が難しくなる。

ここが踏ん張りどころ。  
大変な状況の中でも削ってはいけない業務、疎かにできない使命がある。  
薬剤師という職能を生かし、医療の質の確保に最前を尽くす必要がある。  
逆にここで職能を生かせない薬局が増えるとなると、医療の質も医薬分業もな  
い。